

朝日遺跡出土木製品の出土地点および 器種・樹種組成についての再検討

樋上 昇

『朝日遺跡Ⅶ』で筆者が報告・分析して以降、2004～2007年度の発掘調査で、さらに429点もの木製品が出土した。これをうけて、本稿では1511点におよぶ朝日遺跡出土木製品を、出土地点・器種組成・樹種組成の変遷と器種・樹種の相関関係の視点で新たに分析し直した。

1. はじめに

愛知県清須市から名古屋市西区にかけて広がる朝日遺跡では、1972～79年度の愛知県教育委員会、1981年度の（財）愛知県教育サービスセンター、1985～89年度の（財）愛知県埋蔵文化財センター、1998～2003年度および2004～07年度の愛知県埋蔵文化財センター、さらには断続的におこなわれている名古屋市教育委員会による発掘調査などで、これまでに弥生時代中期前葉から古墳時代中期にいたる大量の木製品が出土している（愛知県教育委員会1982、愛知県埋蔵文化財センター1992・2007・2009ほか）。

このうち2003年度までの1082点の木製品については、2007年度に刊行した『朝日遺跡Ⅶ』において、筆者自身が詳細に報告・分析をしている（樋上2007a・b）。しかし、2004～07年度の出土木製品429点に関しては、整理業務と必要最低限の原稿執筆はしたものの、報告書の編集方針によって『朝日遺跡Ⅶ』と同様の分析作業をおこなうことができなかった。

そこで小論では、朝日遺跡の大規模調査が一段落したこの機会に、これまで出土した1511点におよぶ木製品について、所属時期ごとの出土地点・器種組成・樹種組成の変遷、そして全時期を通しての器種と樹種との相関関係についての分析を試みたいと思う。

2. 木製品出土地点の変遷

『朝日遺跡Ⅶ』においても時期ごとに主要木製品の出土地点をドットで示した図を作成したが、小論では『朝日遺跡Ⅷ』の総集編で用いられている朝日遺跡全体図に、その後の出土木製品も加えてプロットし直した。特にどこで木製品の製作がおこなわれていたかを知るために、未成品および原材が出土した地点と完成品（廃棄品）のみの出土地点のドットを分けることとした（図1～4）。

ちなみに所属時期のわかる木製品は1339点。それを『朝日遺跡Ⅶ』での時期区分に従って分けたのが表1である。朝日遺跡の成立は縄紋時代後期～弥生時代前期（朝日1期）に溯るが、残念ながらその時期の木製品は、これまで1点も出土していない。その理由としては、当該期の居住域である貝殻山貝塚地点（後の南居住域の南西隅付近）の調査事例がきわめて少ないためと考えられる。

朝日2・3期が弥生時代中期前葉（朝日式期）、朝日4・5期が弥生時代中期中葉（貝田町式期）、朝日6期が弥生時代中期後葉（凹線紋期）、朝日7期が弥生時代後期（八王子古宮～山中式期）、朝日8期が古墳時代前期前半（廻間Ⅰ～Ⅲ式期）、朝日9期が古墳時代前期後半～中期（松河戸Ⅰ～宇田式期）である。

なお、表1のうち、朝日3～4期と朝日5～

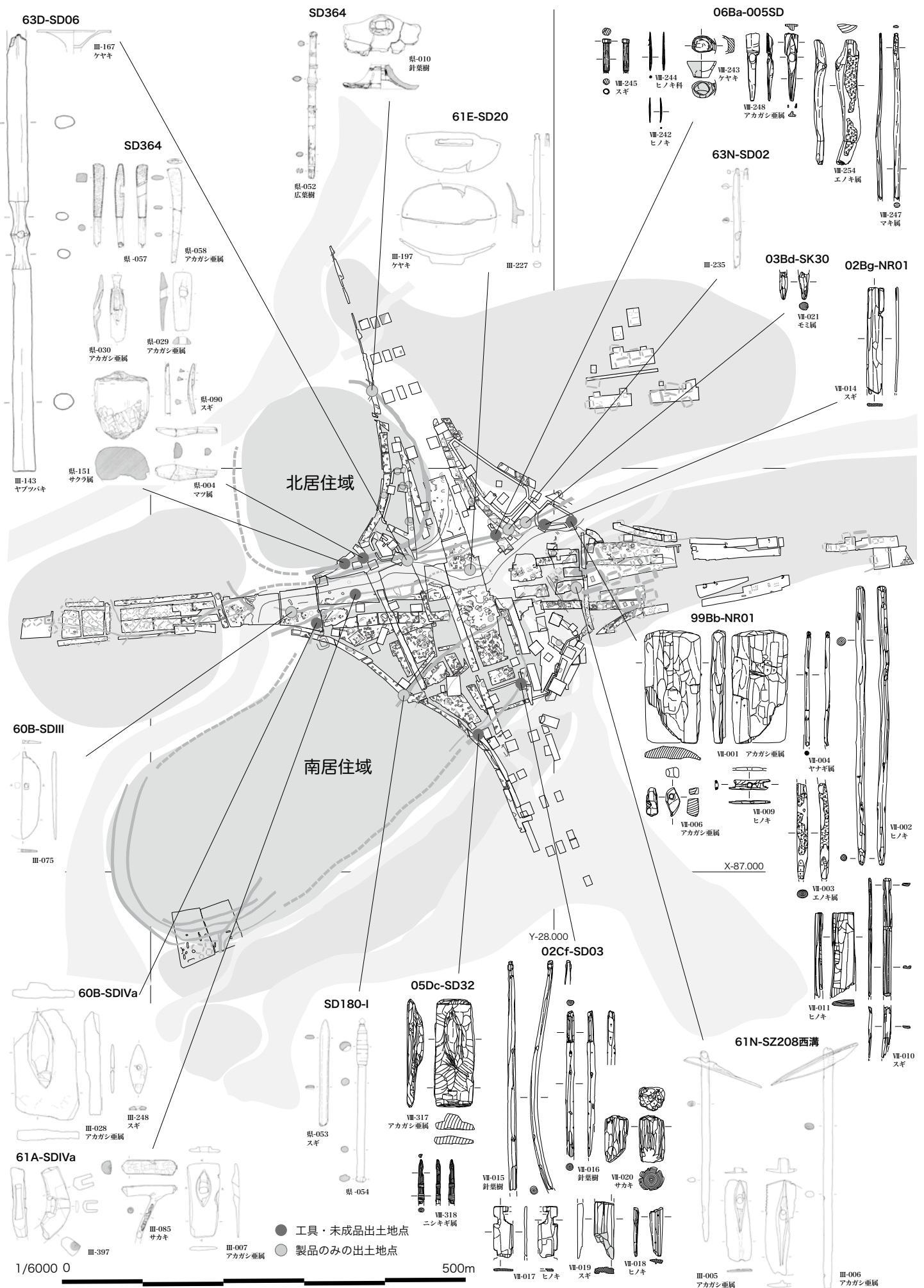


図1 弥生時代中期前葉（朝日2・3期）の木製品出土地点（遺構配置図1:6,000 木製品1:18）

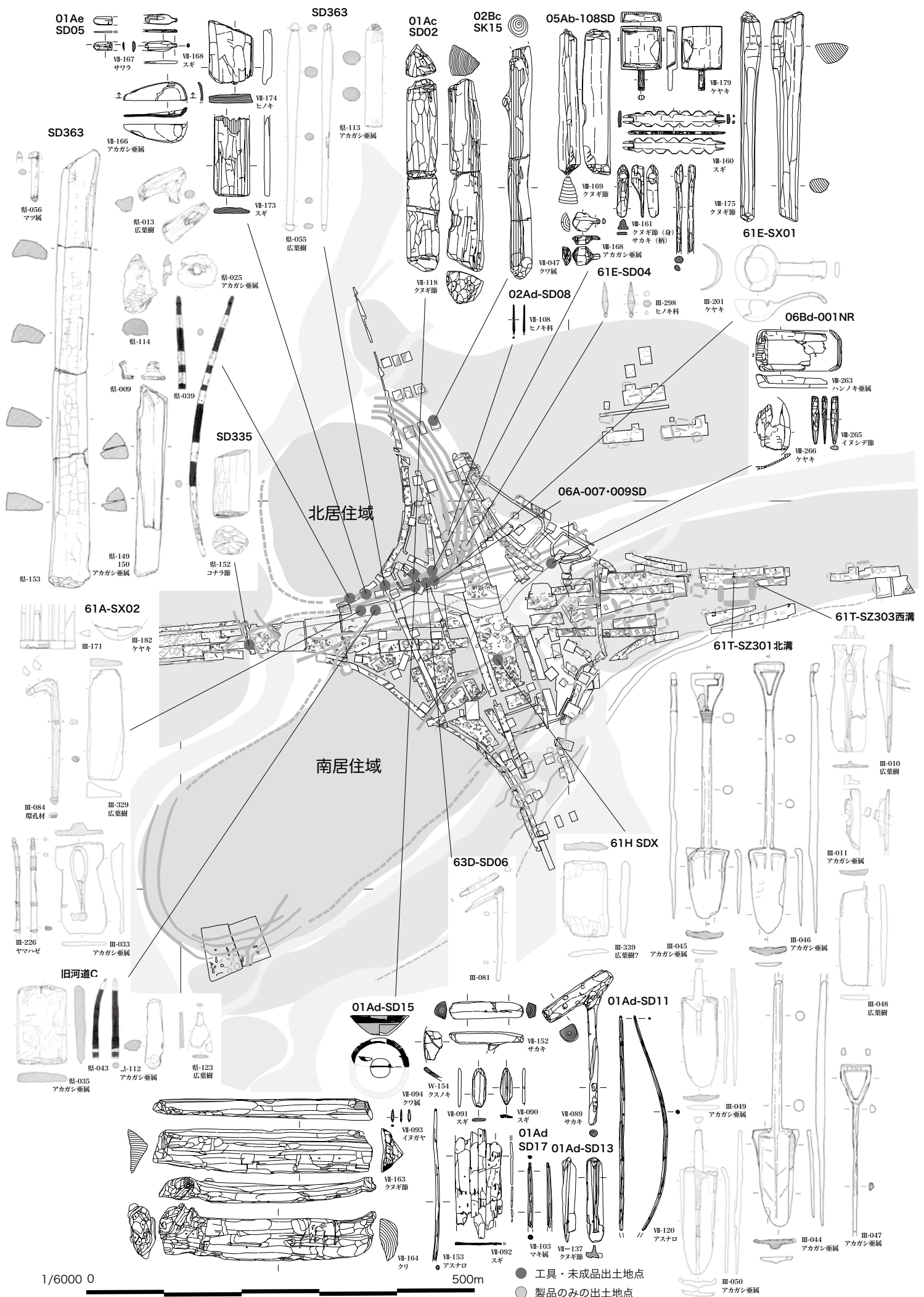


図2 弥生時代中期中葉（朝日4・5期）の木製品出土地点（遺構配置図 1:6,000 木製品 1:18）

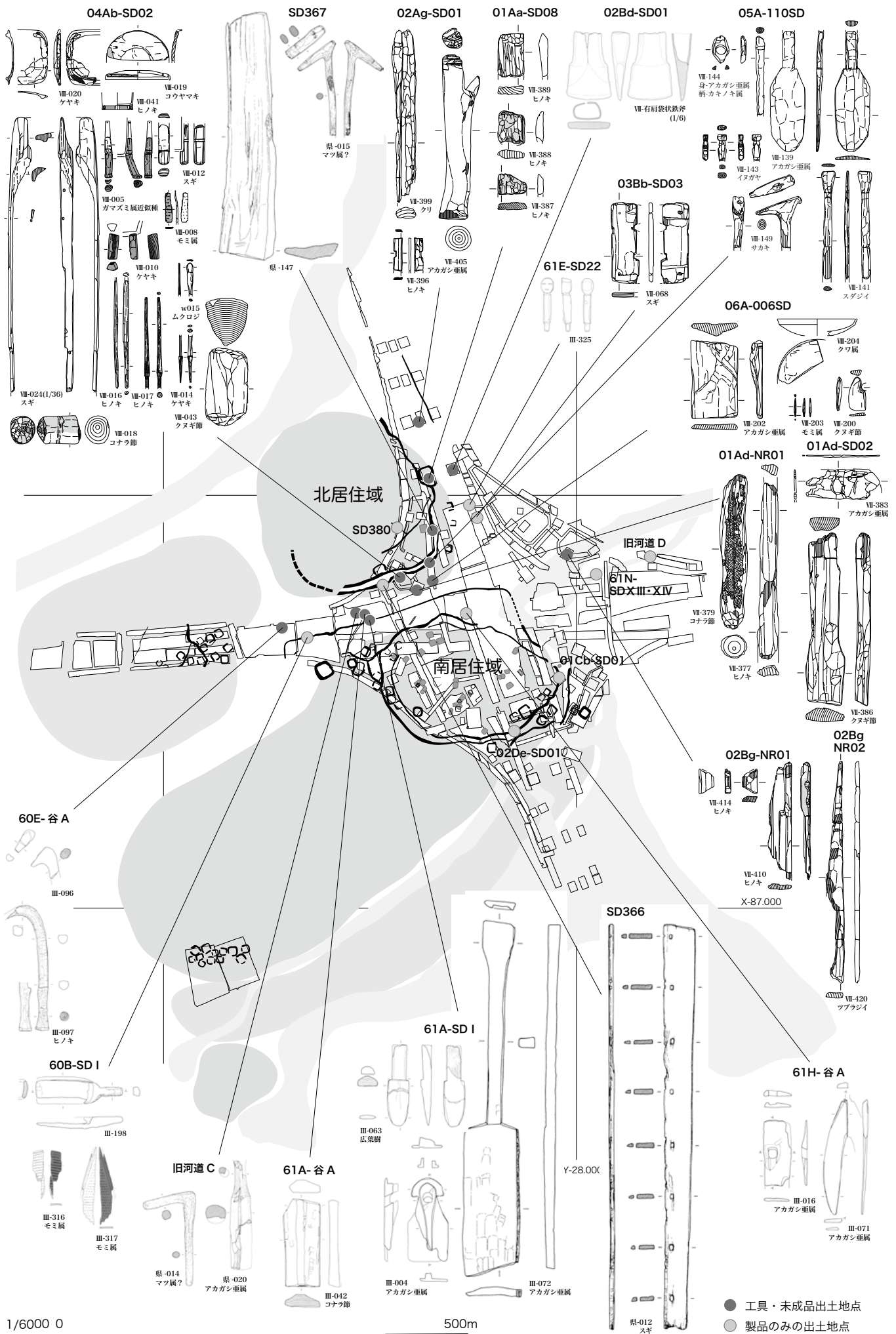


図4 弥生時代後期（朝日7期）の木製品出土地点（遺構配置図1:6,000 木製品1:18）

6期とした、いわゆる過渡期にあたる資料は、その後の分析からは外している。

弥生時代中期前葉（朝日 2・3期）

遺跡の中央を北東から南西に流れる谷 A を挟んで、その北側に北居住域、南に南居住域が形成される。また、それぞれの居住域の周辺には墓域が展開する。特に南居住域の東側の墓域にはこの時期から弥生時代中期中葉にかけて超大型方形周溝墓群が築かれる。

木製品の出土地点は、おおむね前述の谷 A 沿いに展開している（図 1）。なかでも東側の墓域の北側からも点々と未成品や原材を含む木製品群が出土しているのがこの時期の特徴といえる。この地点からさらに北東側の地域は日本最古級の銅鐸鑄型が出土している地点でもあり、青銅器を始めとする様々な手工業生産がおこなわれていたエリアであった可能性がある。

それとともに、北居住域と南居住域の環濠内においても木製品生産を認めることができる。

また、長軸が 30m を超える超大型方形周溝墓 SZ208 の西溝からは、刃部を互い違いに配置した直柄平鍬 2 点が溝底から出土している。

弥生時代中期中葉（朝日 4・5期）

この時期になると、東墓域北側エリアでの木製品生産はほぼ停止し、北居住域南方の環濠および谷 A に集中する（図 2）。特に最も内側の環濠からは広葉樹の丸太や分割材がめだつ。

それに対して、南居住域からの出土は 61H 区の SD X から直柄平鍬未成品が 1 点出土しているのみにとどまる。

また、東墓域ではやはり超大型方形周溝墓の溝底から一木平鋤 3 点がきれいに並べられた状態で出土している。

弥生時代中期後葉（朝日 6期）

弥生時代中期前葉以来の環濠集落がいったん廃絶し、複数の小規模な居住域と墓域がセットとなって広範囲なエリアに展開する。

それにとまって、木製品の出土地点、特に未成品や原材が出土する地点が前段階と比較して非常に広範囲にバラついている（図 3）。

さらに前段階の超大型方形周溝墓の溝（61T 区 SZ301 北溝）を利用して木製品生産をおこなっていることも興味深い。また、どの地点においても未成品の組成が似通っていることも重

要と思われる。

製品では、谷 A の分岐点にあたる 61H 区に築かれた複数の井戸に白をいくつも重ねて転用していること、居住域の南限に位置する 99Ce 区の SD07 から弓のみがまとまって出土していることも注目される。

弥生時代後期（朝日 7期）

弥生時代中期後葉の洪水層によって谷 A の西側が埋没し、流路が南居住域の南側のみとなる。それとともに、前段階では形成されなかった北居住域と南居住域の環濠が新たに掘削されるようになる。

この時期、木製品の出土そのものは広範囲に分布する。しかし未成品や原材に限ってみれば、おおむね北居住域の周辺にのみ集中することが見て取れる（図 4）。また、04Ab 区 SD02 のように、これまで朝日遺跡では認められなかった超精製容器類が北居住域から出土していること、さらには朝鮮半島産の有肩袋状鉄斧が内部に木質部を遺したまま、やはり北居住域の縁辺で出土したことはきわめて重要である。

おそらく当該期においては、超精製木製品を主体とした木製品生産が北居住域の周辺で集中的におこなわれた可能性が高い。このことは、この時期の北居住域の性格を考えるうえできわめて重要である。

3. 器種組成の変遷

表 1 は所属時期不明の木製品を除いた 1339 点について、大まかに分類した器種別にカウントした集計結果を時期ごとに並べたものである。そのうち、古い時期の調査ではサンプリングにバラツキのある杭・土木材と、具体的に用途を示す名前がつかない棒状品・板状品などを割愛してグラフ化したのが図 5 である。

このなかで特に注目すべきは、「掘削具」とその柄のパーセンテージである。時期ごとの総点数（グラフ右端の n 値）が一定ではないものの、弥生時代中期前葉・弥生時代中期後葉・廻間 I 式期の 3 時期が、他の時期に較べて多いことが一見してわかる。

筆者は以前より一貫して、鍬・鋤類は水稻耕作のみに用いる「農具」ではなく、水田の造成、

表1 時期別器種組成一覧表

	朝日2・3期 (弥生中期前葉)	朝日3～4期	朝日4・5期 (弥生中期中葉)	朝日5～6期	朝日6期 (弥生中期後葉)	朝日7期 (弥生後期)	朝日8期前半 (廻間Ⅰ)	朝日8期後半 (廻間Ⅱ・Ⅲ)	朝日9期 (松河戸Ⅰ～宇田)	合計
掘削具	16	3	14	11	42	18	12	1	1	118
掘削具柄	0	0	2	0	2	3	3	1	0	11
農具	1	2	6	5	9	3	0	0	4	30
工具・雑具	4	5	11	7	34	9	3	1	1	75
刳物容器・カゴ	8	4	12	3	9	10	5	1	0	52
食事具	2	3	2	0	0	0	1	0	0	8
紡織具・編み具	2	5	7	4	3	4	0	0	0	25
運搬具・漁撈具	1	0	2	0	2	5	0	0	1	11
狩猟具・武具	9	7	17	3	12	7	1	0	1	57
服飾具	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
威儀具	4	0	2	0	2	1	0	0	0	9
祭祀具	1	0	3	0	3	7	0	2	1	17
楽器？	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
建築部材	3	7	9	2	5	8	2	3	2	41
杭	5	1	38	5	17	19	70	9	8	172
土木材	0	0	3	0	0	0	0	1	0	4
不明部材	2	4	7	3	6	0	4	0	1	27
棒状品	20	11	45	11	44	16	21	9	14	191
板状品	32	17	76	20	64	43	41	17	32	342
残材	0	2	0	1	7	10	10	1	19	50
分割材	5	4	16	4	9	9	5	0	3	55
丸太	7	1	15	1	1	7	8	1	1	42
合計	122	77	287	80	271	180	186	47	89	1339

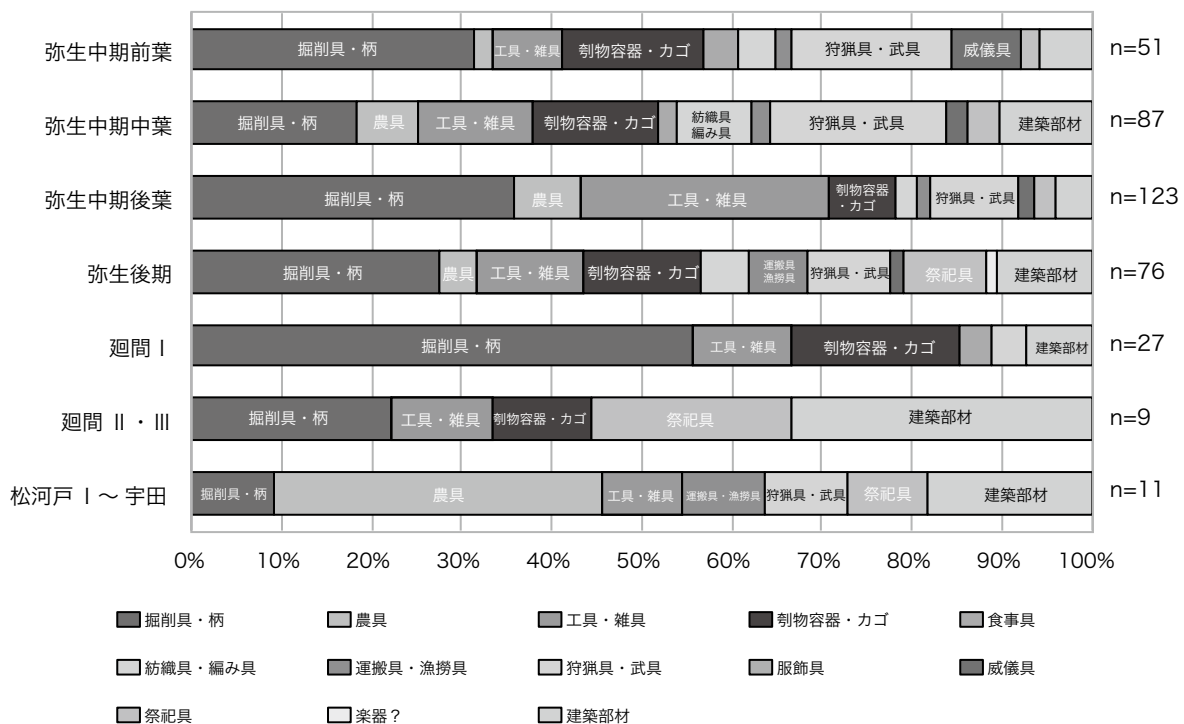


図5 器種組成変遷グラフ（杭以下を除く）

環濠・方形周溝墓・竪穴建物などの掘削に用いる土木作業用の「掘削具」でもあり、むしろ「農具」としての使われ方より「掘削具」として活躍する場面が多かったのではないかと考えてきた（樋上 2000）。その推論が正しければ、この3 時期の掘削具の突出は、集落そのもののレイ

アウトが大きく変化したことと密接に関わっている可能性が高いことを示している。

「掘削具」以外で目につくのは、弥生時代中期後葉の「工具・雑具」の多さである。このことは、弥生時代中期前葉～中葉と異なり、当該期には小規模な居住単位ごとに斧柄を保有し、

個別に木製品生産活動をしていた結果ではないかと思われる。

そのほかでは、弥生時代中期前葉～中葉の「狩猟具・武具」の多さがめだつ。

また、大規模な集住形態がみられなくなった廻間Ⅰ式期以降は、木製品の点数そのものも少ないうえ、器種組成のあり方も弥生時代後期までとは大きく異なっている。

4. 樹種組成の変遷

表2は、樹種未同定および過渡期の資料を除いた1128点について、主要樹種の点数を時期ごとに並べたものである。ちなみに、朝日遺跡で確認されている全ての樹種は、表3のとおりで、針葉樹14種（ヒノキ属・ヒノキ科は除く）、広葉樹41種である。

針葉樹では、スギが206点（中間時期・時期不明も含めれば273点）、ヒノキ科（ヒノキ・サワラ・アスナロ・ネズコなどを含む）は255点（スギと同様の計算法では307点）と圧倒的に多く、この両者で針葉樹全体の約76%、全樹種中でも約38%を占める。このあらゆる時期を通じて針葉樹、なかでもスギとヒノキ科が卓越するのが朝日遺跡の大きな特徴である。

次に注目すべきは、スギとヒノキ科の比率の変化である（図6）。弥生時代中期前葉（点数では弥生時代中期中葉）をピークとしてスギは減り続け、弥生時代中期後葉にほぼ両者が拮抗し、弥生時代後期にはスギよりヒノキ科が多くなる。

この現象について、筆者は次のように考えている。もともと濃尾平野低地部ではスギもヒノキ科も皆無で、東濃や養老など周辺の山地で伐り出したものを筏に組んで、河川を利用して朝日遺跡に搬入していた。ただ、植林が進んだ現代と異なり、自然植生では、スギはヒノキ科に較べて谷筋や低地部周辺などに生育しやすいことが知られている。それゆえ、朝日遺跡からみても、スギの方がより利用しやすい位置関係に自生していたと考えられる。このスギ林を強度伐採していった結果、低地周辺のスギが枯渇し、徐々に山寄りのヒノキ科に置き換わっていった

と説明することができる（樋上2007b）。

それ以外の針葉樹ではマキ属（イヌマキ）が多い。これは広葉樹とともに、人の手が加わったいわゆる里山でしばしばみられる樹種である。弥生時代中期後葉に向けて増加していることから、朝日遺跡周辺で徐々に「日常使いの林」が人為的に形成されていったことを伺わせる。

通常の遺跡では古墳時代中期以降に増加することが多いマツ属が一貫して多いのも朝日遺跡の際だった特徴である。これは、木曽川の沖積作用が沈静化して沖積平野が安定化する時期が遅かった濃尾平野低地部では、朝日遺跡が形成された縄紋時代後期～弥生時代中期前葉段階ではアシ・ヨシといった草本類のほかに、裸地的環境を好むマツ属程度しかなかったというきわめて貧相な植生を示しているものと思われる。

広葉樹ではアカガシ亜属、コナラ節、クヌギ節の順に多い。後述するようにアカガシ亜属は掘削具を中心に多目的に用いられている。この樹種もまた、本来は沖積低地には自生していない。特に欽などに使われる樹齢100年を超える大径木となれば、なおさらである。それゆえ、周辺の丘陵部から分割製材された状態で搬入されたと想定できる。ただ、廻間Ⅰ式期以降は急激にアカガシ亜属の細い芯持ち材が増加することがわかっており、大規模集落が放棄されたのち、里山の環境から潜在的な自然植生である常緑広葉樹林へと遷移していった可能性がある。

いっぽう、コナラ節・クヌギ節・サカキ・ヤブツバキ・クリなどは、マキ属と同様に里山を構成する樹種である。これらが弥生時代中期後葉に向けて増加している現象は、やはり朝日遺跡周辺に人為的な林が創出されたことを示しているのであろう。逆に、堅穴建物の建築材や燃料材となるこれらの樹種を恒常的に獲得できる環境を創り出さない限り、朝日遺跡のような大規模集落を長期間継続させることはできなかったと考えられる。

このほかで注目すべきはケヤキとヤナギ属で、いずれも比較的低地や河畔林でみられる樹種である。この両者もマツ属と同様に、本来的に朝日遺跡周辺に自生していた樹種である可能性が高い。

表2 時期別器種組成一覧表

	弥生中期前葉	弥生中期中葉	弥生中期後葉	弥生後期	廻間Ⅰ	廻間Ⅱ・Ⅲ	松河戸Ⅰ～宇田	合計
スギ	36	69	52	21	15	6	7	206
ヒノキ科	19	36	46	48	39	21	46	255
マキ属	3	8	14	4	1	0	4	34
イヌガヤ	0	3	13	5	5	1	4	31
マツ属	2	10	1	3	4	3	0	23
モミ属	1	2	2	8	4	0	4	21
コウヤマキ	0	1	1	2	6	1	2	13
その他の針葉樹	3	5	6	3	0	0	4	21
小計	64	134	135	94	74	32	71	604
アカガシ亜属	18	35	34	15	17	2	4	125
クヌギ節	4	13	30	14	29	0	1	91
コナラ節	1	7	5	7	13	1	5	39
サカキ	3	4	9	1	4	1	0	22
ケヤキ	3	6	1	5	4	0	1	20
エノキ属	4	3	5	7	3	1	6	29
ヤブツバキ	3	3	4	1	1	0	1	13
クリ	0	2	2	2	2	1	2	11
ヤナギ属	1	8	0	0	1	0	0	10
ヌルデ	0	0	0	0	10	0	0	10
シイノキ属	0	3	2	2	2	0	0	9
クスノキ科	0	1	2	0	1	0	0	4
クワ属	0	3	1	1	0	1	1	7
その他の広葉樹	14	38	25	29	21	1	6	134
小計	51	126	120	84	108	8	27	524
合計	115	260	255	178	182	40	98	1128

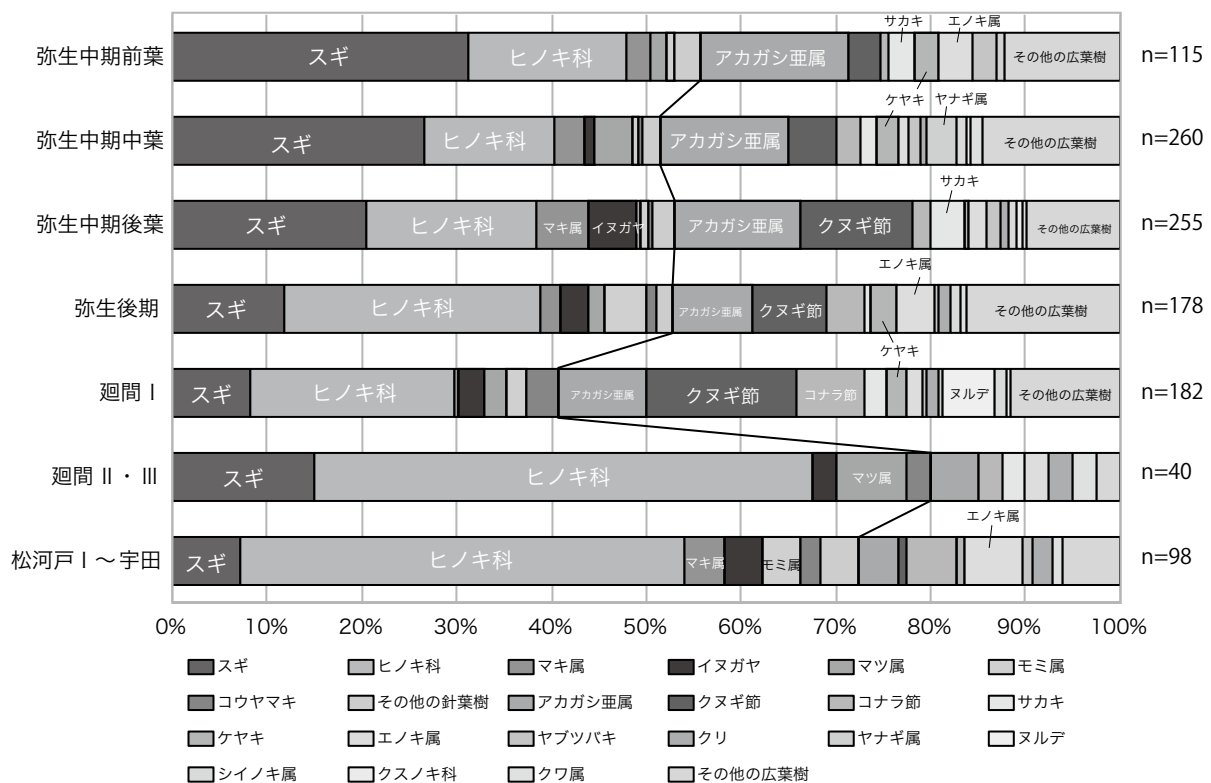


図6 器種組成変遷グラフ

5. 器種ごとの樹種組成

次に、器種ごとの樹種組成についてみておきたい（表3・図7）。

掘削具とその柄は100% 広葉樹である。掘削具はアカガシ亜属が60% 近くを占め、残りをクヌギ節とコナラ節が補完する。これは前述の

ように、尾張低地部でアカガシ亜属大径木の入手が困難であったための対応策と考えられる。

掘削具柄については、弾力性のあるサカキを用いることが多い。これは特に直柄よりも、曲柄鋏の膝柄に顕著である。おそらく膝柄においては、サカキの枝分かれ部分の角度が都合良かったという面もあったのだろう。

農具、工具・雑具、容器までは広葉樹が圧倒

表3 器種別樹種組成一覧表

	掘削具	掘削具柄	土木具	農具	工具 雑具	容器	食器	紡織具 編み具	運搬具 漁撈具	狩猟具 武器	服飾具	威儀具	祭祀具	楽器?	建築部材	杭	土木材	不明部材	棒状品	板状品	残材	分割材	丸太	その他	合計
スギ	0	0	0	5	7	9	1	9	7	5	0	1	6	0	11	8	0	5	52	133	7	4	3	0	273
ヒノキ	0	0	0	1	4	3	0	5	0	6	0	0	5	1	9	15	2	4	44	110	21	1	0	1	232
サワラ	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	3	2	0	0	2	7	1	0	0	0	19
ヒノキ属	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	1	0	1	0	0	0	1	3	0	0	0	0	8
アスナロ	0	0	0	0	0	0	0	2	0	2	0	0	1	0	0	2	0	1	4	7	0	1	0	0	20
ネズコ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	2	1	0	0	0	0	5
ヒノキ科	0	0	0	1	3	0	0	0	0	2	0	0	0	0	1	4	0	0	2	8	0	2	0	0	23
マキ属	0	0	0	0	1	0	0	1	0	17	0	0	0	0	4	7	0	0	22	2	1	0	0	0	55
イヌガヤ	0	0	0	0	3	0	0	2	0	10	0	1	1	0	1	6	0	1	6	2	2	2	0	0	37
マツ属	0	0	1	0	4	0	1	1	0	4	0	1	0	0	1	3	0	1	5	3	1	0	0	0	26
モミ属	0	0	0	0	1	1	0	0	0	8	0	0	1	0	0	0	0	0	3	8	1	0	0	0	23
コウヤマキ	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	4	0	0	5	4	0	0	0	0	15
カヤ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	1	0	0	5
ツガ属	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	3	0	0	0	0	4
イチイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
カラマツ属	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
針葉樹	0	0	0	0	1	1	0	0	1	1	0	0	0	0	1	1	0	0	6	5	0	0	0	0	17
小計	0	0	1	8	25	15	2	20	10	56	0	3	18	1	34	54	2	13	156	297	34	11	3	1	764
	掘削具	掘削具柄	土木具	農具	工具 雑具	容器	食器	紡織具 編み具	運搬具 漁撈具	狩猟具 武器	服飾具	威儀具	祭祀具	楽器?	建築部材	杭	土木材	不明部材	棒状品	板状品	残材	分割材	丸太	その他	合計
アカガシ亜属	71	1	0	2	7	2	2	1	1	0	0	1	1	0	3	19	1	1	4	5	1	5	10	0	138
クヌギ節	16	1	0	8	11	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	39	0	0	2	13	0	11	2	0	104
コナラ節	12	0	0	1	5	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	4	0	4	4	3	0	3	8	0	46
エノキ属	0	0	0	1	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3	1	0	1	4	2	11	6	0	33
ケヤキ	0	0	0	0	0	17	2	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	1	4	2	1	1	0	31
サカキ	0	6	0	0	12	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2	0	1	3	2	1	0	1	0	29
クリ	0	0	0	0	0	1	0	0	3	0	0	0	0	0	0	3	0	0	1	3	0	3	1	0	15
ヤブツバキ	0	1	0	2	2	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	2	0	0	0	3	0	13
カエデ属	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0	0	2	2	0	1	1	0	13
シイノキ属	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	3	0	0	1	3	0	1	0	0	11
ムクノキ	0	0	0	1	3	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	1	1	1	1	0	11
ヤナギ属	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	9	0	0	1	0	0	0	0	0	11
ヌルデ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0	1	0	0	0	0	0	0	11
クスノキ科	0	0	0	2	1	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	8
クワ属	0	0	0	0	0	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2	2	0	0	1	0	9
サクラ属	0	0	0	2	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	1	1	1	1	0	9
ムクロジ	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	1	1	2	0	7
カマツカ属	0	0	0	0	2	2	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
ミズキ属	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	2	0	5
ハンノキ亜属	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	4
トチノキ	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	3
ヒサカキ	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	3
ニシギキ属	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
ヤマハゼ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
エゴノキ属	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	1	0	3
モクレン属	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	1	0	0	0	0	3
カキノキ属	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
イヌシデ節	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	2
アブキ属	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2
ムラサキシキブ属	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	2
ブナ属	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	2
トネリコ属	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2
タブノキ属	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	2
コクサギ	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
ガズミ属近似種	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
ハリギリ	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
ハコヤナギ属	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
ヤシヤブシ節	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
カバノキ属	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
キハダ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
ニガキ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
燗孔材	0	0	0	0	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	4
散孔材	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	3
広葉樹	22	3	0	4	2	0	0	0	0	1	0	2	0	0	0	1	0	3	5	1	0	0	6	0	50
小計	123	14	0	27	52	35	8	6	6	7	0	4	3	0	12	115	3	11	33	50	9	42	50	0	610
樹種不明	0	0	0	3	10	15	0	8	1	9	1	2	2	0	7	7	0	11	10	33	10	5	3	0	137
合計	123	14	1	38	87	65	10	34	17	72	1	9	23	1	53	176	5	35	199	380	53	58	56	1	1511

的に多く、紡織具・編み具、運搬具・漁撈具、狩猟具・武具、祭祀具、建築部材は針葉樹が卓越する。

農具では、豎杵にヤブツバキの芯持ち材とクヌギ節の分割材が、臼にクスノキ科が多用される。

工具、特に斧柄については、石斧の柄には縦斧にはアカガシ亜属やクヌギ節・コナラ節など、横斧には鋤膝柄と同様にサカキを用いるが、鉄斧になると両者ともにスギ・ヒノキ科などの針葉樹へと移り変わっていく。

容器についてはケヤキが多くクワ属が少ないのは東日本的な様相といえるかもしれない。

狩猟具・武具のうち、スギ・モミ属は楯に、マキ属とイヌガヤは弓に用いられている。楯では、おおむねスギからモミ属へと移り変わっていくようである。弓にはヒノキ科やマツ属も使用されている。

杭では、クヌギ節、ヒノキ科、アカガシ亜属、ヤナギ属、ヌルデの順となる。このうち、特にクヌギ節とヤナギ属は、朝日遺跡周辺の植生を反映したものと考えられる。

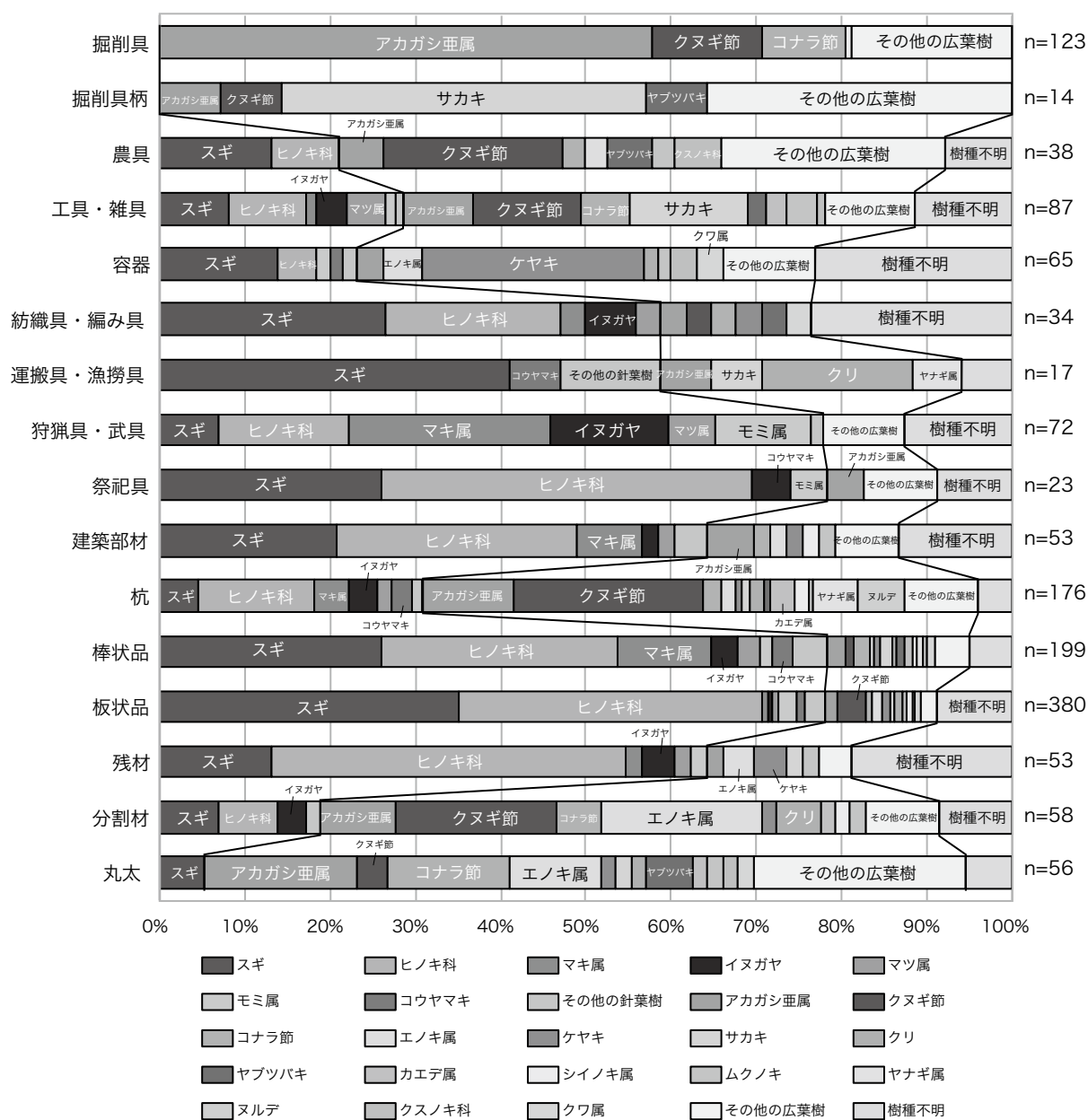


図7 器種別樹種組成グラフ

棒状品、板状品、残材では、スギやヒノキ科といった針葉樹が圧倒的多数を占める。

しかしながら、分割材や丸太では逆に広葉樹が多い。ここではエノキ属がめだつが、この樹種に関しては、朝日遺跡では点数こそ多いものの、何か決まった使用法があるわけではない。

6. まとめにかえて

以上、これまで長年の発掘調査で出土した朝日遺跡の木製品 1511 点について、その出土地点・器種組成・樹種組成の変遷や器種と樹種の相関関係について、ごく簡単な分析をおこなってきた。基本的には 2007 年度に刊行した『朝日遺跡Ⅶ』における筆者自身の分析とはさほど変わらないため、結果的には屋上屋を重ねることとなった。

ただ、2009 年度刊行の『朝日遺跡Ⅷ』に掲載された、特に弥生時代後期に属する北居住域

周辺出土資料が一気に 100 点近く増加したことによって、同時期の各種データの信頼性が格段に高くなったのは重要である。

この弥生時代後期の木製品は、近畿地方を始めとして全国的にもまとまって出土する遺跡はきわめて限られているのが現状である。しかし、当該期には工具の鉄器化が完了するとともに、度重なる強度伐採により沖積低地周辺におけるアカガシ亜属大径木の枯渇が想定されている。以上の状況をうけて、列島規模で木製品の生産・流通体系が大きく変化したと想定されるのが、この弥生時代後期なのである（樋上 2005・2011）。

北居住域周辺で認められる超精製容器類などを含む木製品の集中生産体制は、山陰地方の鳥取県青谷上寺地遺跡などと共通した様相を呈しており、首長から王へと転化していく支配者層によって管理される新たな木製品生産のあり方を示しているといえよう（樋上 2009）。

参考文献

- 愛知県教育委員会 1982 『朝日遺跡』
愛知県埋蔵文化財センター 1992 『朝日遺跡Ⅲ』
愛知県埋蔵文化財センター 2007 『朝日遺跡Ⅶ』
愛知県埋蔵文化財センター 2009 『朝日遺跡Ⅷ』
樋上 昇 2000 『木製農耕具』ははたして『農耕具』なのか - 新たな機能論的研究の展開を考える - 『考古学研究』第 47 巻第 3 号 p.97-1-0 考古学研究会
樋上 昇 2005 「木製品専門工人の出現と展開 - 伊勢湾周辺地域における木製品の生産と流通をめぐって - (上・下)」『古代学研究』第 168 号 p.1-18・169 号 p.21-37 古代学研究会
樋上 昇 2007a 「木製品」『朝日遺跡Ⅶ 出土遺物』p.168-244 愛知県埋蔵文化財センター
樋上 昇 2007b 「朝日遺跡出土木製品の樹種組成と周辺の古植生」『朝日遺跡Ⅶ 総括』p.35-60 愛知県埋蔵文化財センター
樋上 昇 2009 「木製容器からみた弥生後期の首長と社会 - 青谷上寺地遺跡と朝日遺跡からの素描 -」『木・ひと・文化 - 出土木器研究会論集 -』p.61-76 出土木器研究会
樋上 昇 2011 「木工技術と地域社会」甲元真之・寺沢薫編『講座 日本の考古学 第 5 巻 弥生時代 上』p.731-755 青木書店

「柳ケ坪型土器」について

● 宮腰健司

有段口縁壺の内外面に羽状刺突を施された土器が「柳ケ坪型土器」として初めて認識されたのは1952年の柳ケ坪遺跡の調査であった。その後事例は増え、名称も定着してきた。本稿では柳ケ坪型土器の要素のひとつである口縁部の内外面刺突に着目し、定義や分類・変遷・分布といった基礎的な問題について整理した。

はじめに

「柳ケ坪型土器」という名称は、1952年に行なわれた横須賀中学校の発掘調査の報告書で、杉崎章氏によって用いられたのを嚆矢とする。この中で杉崎氏は、当該の土器が出土したピットが寄道式をまじえた黒色有機砂層を切っていることから、寄道式に次ぐ時代のものであるとして「柳ケ坪型の土器」という呼び方をされている（杉崎 1953）。さらに1956年に刊行された『横須賀町史別冊 横須賀の遺跡』（杉崎 1956）では「稜をつくって上方に折れ立った口辺部の、内外面に櫛がき羽状文をめぐらしている壺形土器があるが、この土器は伊勢湾・三河湾の海浜地帯に盛行して、この地域における弥生文化後葉の標識となっており、私たちが「柳ケ坪型」と仮称しているものである。」として、一定の壺に対しての名称であることを示されている（図1）。

大参義一氏は「弥生式土器から土師器へ—東海地方西部の場合—」（大参 1968）において、「柳ケ坪型」と呼ばれる広口壺形土器は元屋敷期から見られるが、盛行するのは石塚期であるとし、斉一性をもった土器であることや、二重口縁壺やパレススタイル壺形土器の系譜にあると述べられている。また岩崎卓也氏も、「柳ケ坪」型土器をパレススタイル土器の嫡流として位置づけられている（岩崎 1985）。一方、浅井（北村）和宏氏はパレススタイル土器の論考の中で、以下の三つの疑問点をあげられている。i）「宮廷式土器」の胴部紋様の変遷過程からするならば、胴部紋様が直線紋帯と波状紋帯からなる「柳ケ坪」型土器を「宮廷式土器」の嫡流に位置づけるには連続性の上でやや難があるものと考えられること。ii）「柳ケ坪」型土器は原則として赤彩されないこと。iii）殆どの「柳ケ坪」型土器の底外面には木葉痕がみられる（岩野見司氏御教示）のに対し、「宮廷式土器」にはかかる

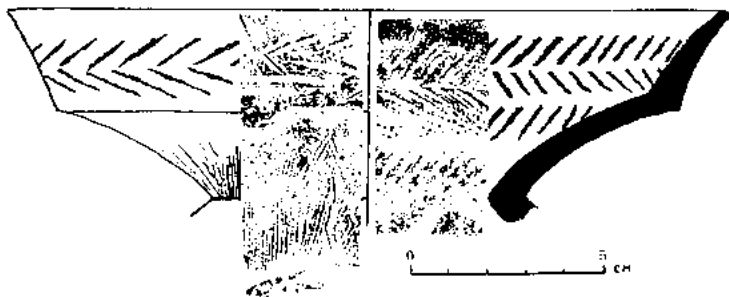


図1 柳ケ坪遺跡出土の柳ケ坪型土器（杉崎 1956 より）

分類

ここで改めて柳ヶ坪型土器を定義しておきたい。まず1) 口縁部が有段状を呈する、2) 内外面に刺突が施される。刺突は横方向に連続し、主に羽状を呈する。3) 体部の文様は上半部に限られ、横方向の直線文と波状文が組み合わされる。4) 体部文様帯及び口縁部文様帯の下部はミガキ調整されることが多い。5) 底部は大きく、円盤状を呈し、底外面が上げ底状に凹面をなすものもある。底外面には木葉痕が残る、6) 赤彩は施されないといった点があげられる(図2)。一方同じ斉一性を有するパレススタイル土器には、a) 口縁部は有段状を呈するが、内面にのみ刺突が施され、外面は無文または凹線または無文で棒状・円形浮文が付けられる。b) 体部上半に文様帯が描かれるが、直線文+波状文・斜位連続刺突→斜位連続刺突・山形文→山形文と変化する、廻間IIからIIIには直線文+山形文のみとなる。c) 口縁部外面から頸部、口縁部内面の文様帯下の頸部、体部外面の文様帯の下位、山形文に赤彩がなされるといった特徴がある(図3)。

今回柳ヶ坪型土器を分類するにあたり、筆者がかかわった姫下遺跡や八畝畑遺跡が所在する矢作川流域の遺跡で出土した柳ヶ坪型土器を用いた(図4)。分類の基準として、定義した1～5まですべてをあてはめていくことが理想であるが、実際の調査においては口縁部のみが出

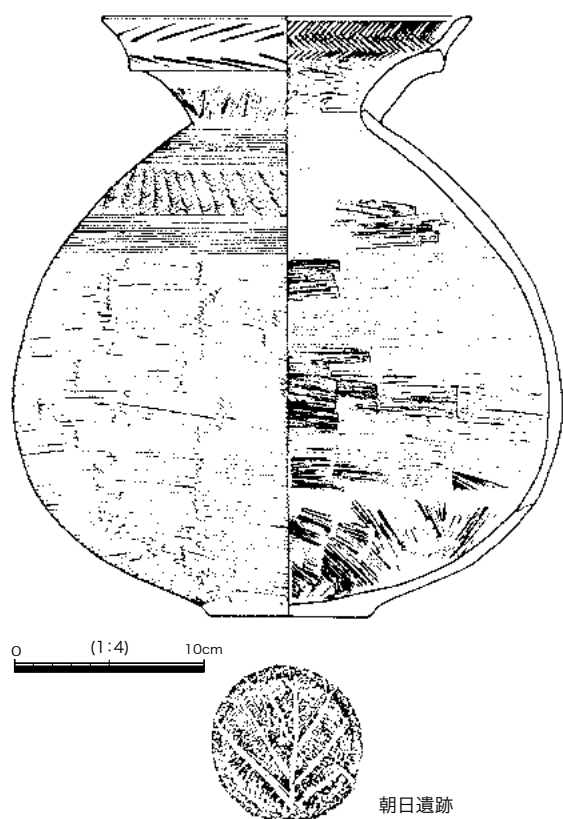


図2 全形がわかる柳ヶ坪型土器

例がみられないこと(浅井 1986)。

本稿では浅井(北村)が提起された問題点を念頭におきつつ、筆者が近年かかわることとなった安城市の姫下遺跡や岡崎市の八畝畑遺跡を含む矢作川流域の遺跡から出土した柳ヶ坪型土器を基にして、伊勢湾周辺地域の様相をみていきたい。

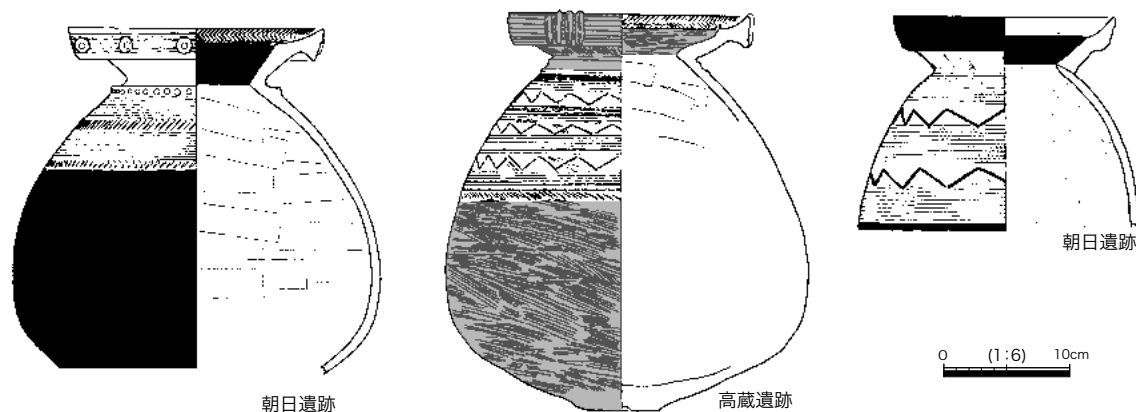


図3 パレススタイル土器

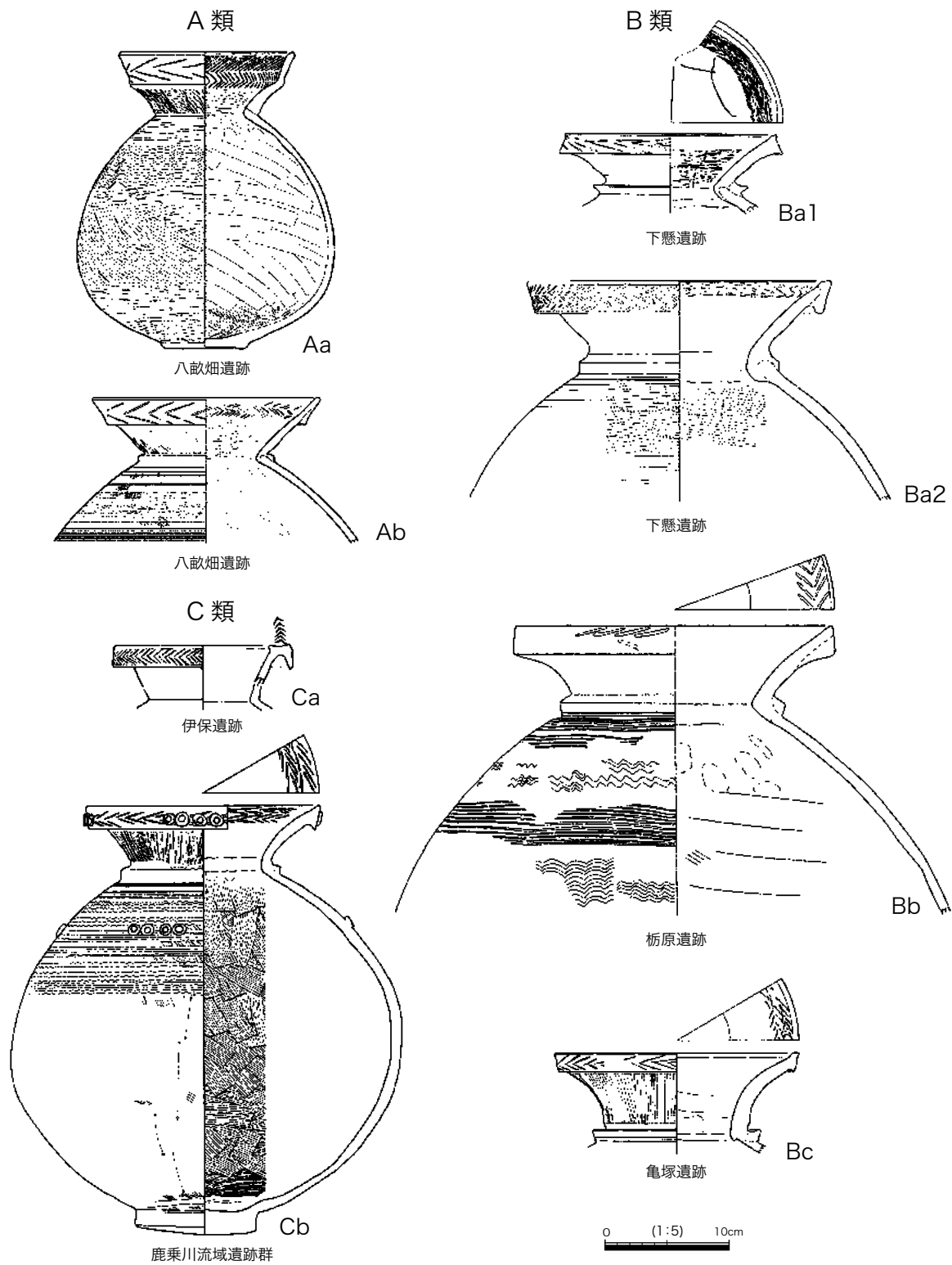


図4 矢作川流域における口縁部内外面刺突加飾壺の分類

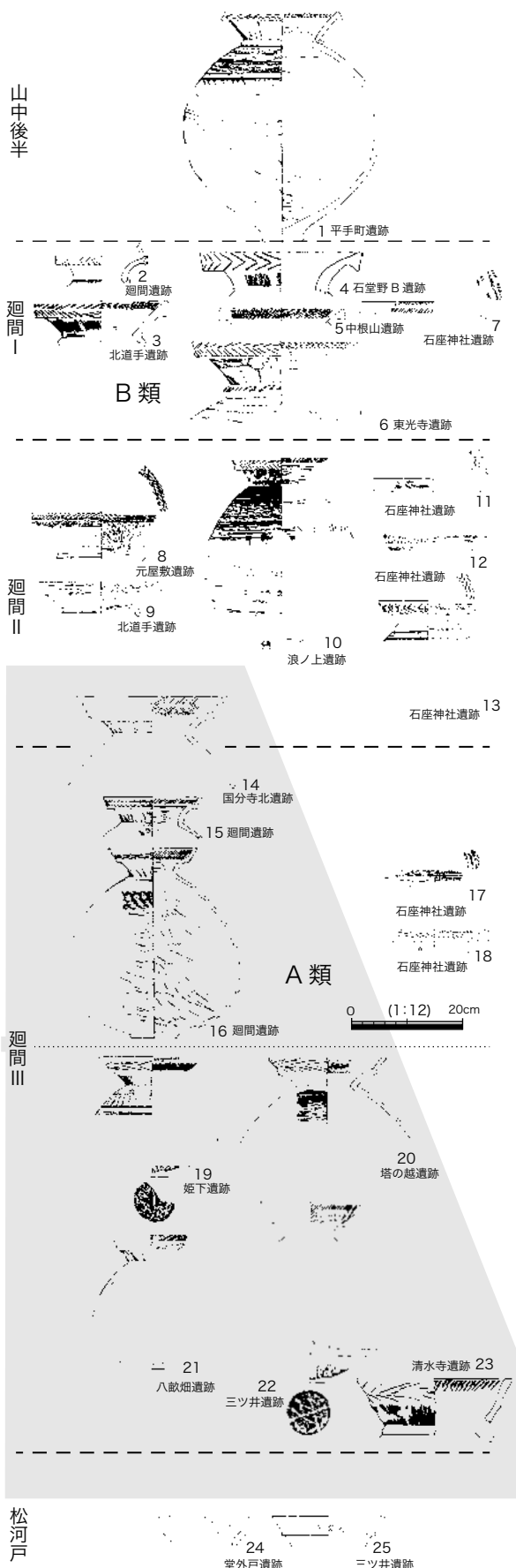


図5 口縁部内外面刺突加飾壺の変遷

土することが極めて多く、口縁部から底部まで揃った個体は数少ない。また木葉痕を有する底部片も目につくが、柳ヶ坪型土器と確実に特定することは難しい。直線文帯と波状文帯が組み合わさった体部片も同様である。そのため今回柳ヶ坪型土器を考えるにあたり、まず2の内外面の刺突に着目して口縁部を抽出し、1の口縁部形態を合わせて分類を行なった。この2（刺突）の要素をもった土器を、本稿では口縁部内外面刺突加飾壺と呼ぶ。

A 類 口縁部が逆八字状に延び、その後上方及び斜め上方に延びて有段となるもの。bは直線的な口縁部の外側に粘土を付加して有段にしているもの。

B 類 口縁部が明瞭な有段状とならないものである。aは口縁部端が下方及び上下方に延びるもの、bは面やや肥厚して面をなすもの、cは上方に短く延びるものである。頸部に突帯が巡るものが多い。

C 類 口縁部の形状がパレススタイル壺などの加飾壺と類似または折衷したもの。

この中でA類とBc類については区分が難しいものが散見された。その場合B類に特徴的な頸部突帯を目安に分けている。

変遷

上述した分類を踏まえ、口縁部内外面刺突加飾壺の変遷を考えてみたい（図5）。

まずA類については、頸部が上方に立ち上がるものから外傾するものに、屈曲して有段となる口縁上半部が、短く・垂直に近く立ち上がるものから、幅広く・外傾するものに移り変わる形態変化が想定できる。廻間遺跡 SZ01 出土の16が廻間 III 前半に比定されるので、19 姫下遺跡 234SU 出土・20 塔の越遺跡 SX01 出土のものが後出に、さらに21 八畝畑遺跡 4037SU 出土・22 三ツ井遺跡 96BaSK14 出土のものへと変化していくと考えられる。19・20・21・22 共伴する遺物からも概ね廻間 III 後半から松河戸 I 前半になると思われる。また口縁部端の形状についても、水平な面をなすものから、外

傾する面をもつもの、段をもたずにそのまま収束するといった移り変わりが想定できる。さらにこのような有段・刺突の要素をもつ土器が、松河戸期の有段口縁の壺・甕へと影響を与えたと考えられるが、口縁部に刺突が施されるものが極めて少ない上に内外面ともに刺突されるといった土器はみられない。また体部の文様もみられなくなっており、直接的な系譜としては捉えにくいものとなっている。さらに清水寺 SB4 出土の 23 は、廻間 III 後半から松河戸 I 初頭に比定される。口縁有段部があまり目立たず、頸部に突帯が巡っており、B 類との折衷が考えられる。

B 類については、口縁部端が面をもって内傾し、下端部が斜め下外方に延びるものから、口縁部端面が垂直になり、端部が垂下するもの、口縁部端面が上下に拡張せず、垂直な面をもつもの、さらに口縁部端面がわずかに外傾し、端部が上方に延びるものへと変化すると想定する。ただ形態の変化を大きく概観すると、このような変化を認めることができるが、B 類の土器に関しては共伴遺物などで確認することは難しい。その中でも、口縁端面が垂直となり、端部が垂下する廻間遺跡 SB32 の 2 は廻間 I 前半に、わずかに外傾する口縁端面を有する北道手遺跡 SD10 出土の 9 は廻間 II に比定される。さらに 9 よりわずかに古いと思われる北道手 SD87 出土の 3 は廻間 I 末～II 初頭と推定される。ただ口縁端部が垂下する石堂野 B 遺跡 SB004 出土の 4 は、共伴遺物からみると廻間 I 末～II 初頭となり、わずかに外傾する東光寺遺跡の 6 は山中末～廻間 I の可能性がある。またこのことに関連するものとして、石座神社遺跡出土の土器群がある。この遺跡は 300 棟を超える竪穴建物が検出されており、それらを基に早野浩二氏によって出土遺物の変遷が詳細に検討されている（早野 2015）。それによると、口縁内外面刺突壺が現れるのは廻間 I 併行期で廻間 III 併行期まで続いているが、口縁部の形態は B の変化で想定したような単純でスムーズな変化を示さないようで、様々な形状の口縁部がそれぞれに変化していくといった様相が示されている。地域的なものも考慮して今後の課題となろう。

分布

図 6・7 は伊勢湾周辺地域における、口縁部内外面加飾壺の分布状況を示したものである。土器に関しては実見し数を数えたものではなく、報告書などからカウントしている。

東三河地域では、石座神社遺跡での B 類の出土が目立つ。ただ上述したようにその形態は多様で、遺跡の消長とも関わるが A 類は出土していない。また豊橋市や豊川市の海岸部では、B 類の多様性が石座神社遺跡ほどではなく、続けて A 類の出土もみられる。また渥美半島の田原市山崎遺跡や西の浜久衛森遺跡で A 類がややまとまって出土しているのが注目される。

西三河地域では、下流域の鹿乗川流域遺跡群周辺での A 類の出土が特徴的である。特に姫下遺跡や八畝畑遺跡のように集中的に出土する遺跡（地点）があることに留意したい。またこの地域では一定量の B 類も出土しており、継続した集落群の存在が考えられる。反対に中流域から山間部にかけては出土量が極端に少なくなる傾向がみられる。

知多半島地域では、柳ヶ坪遺跡がある北部の東海市で A・B 類ともわずかに出土しているが、南部ではみられない。ただ島嶼部の篠島にある神明社貝塚で A 類がまとまって出土しているのが注目される。

尾張地域では、名古屋台地部ではあまり確認できないのに対し、庄内川を挟んで朝日遺跡周辺では A・B 類ともまとまって出土している。さらにこれより多くまとまった分布状況が見て取れるのが、一宮市・岩倉市のある北部地域で、下渡遺跡や御山寺遺跡で A 類が多く出土しており、周辺でも多数の遺跡で認められている。また B 類もそれに重なるように分布する。

美濃地域では、荒尾南遺跡では多様な形態をもつ B 類が 40 点程、A も 30 点程出土しており、突出した状況を示している。荒尾南遺跡以外では A・B 類とも水系に沿った点状の分布を示す。

伊勢地域では、津市から松阪市にかけての地域での B 類の出土が目立つ。この地域でも B は多様であり、口縁部の片面のみの刺突を加えると、口縁部への刺突といった技法がかなり定着

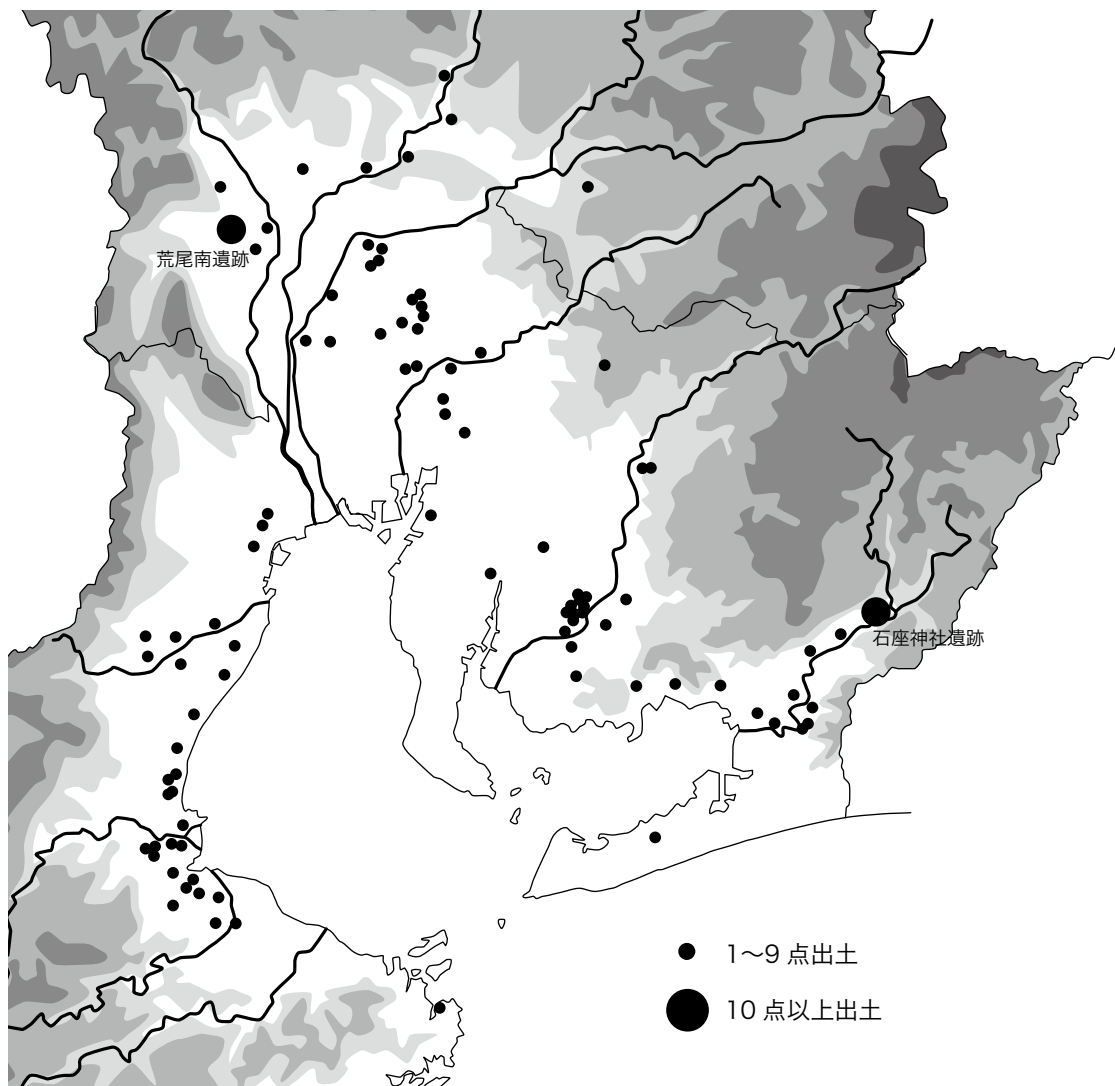


図6 口縁部内外面刺突加飾壺B類出土分布図

している地域といえる。またA類も一定量出土しているが、B類に比べると遺跡数・量とも少なくなる。また志摩地域の白浜遺跡で、A・B類とも一定量出土していることが注目される。

まとめ

これまで柳ヶ坪型土器及びそれから派生する口縁部内外面に刺突をもつ壺について述べてきたが、整理すると下記のようなになる。

まず柳ヶ坪型土器は加飾壺または加飾太頸（広口）壺に分類される。その中で形態・施文が多様であるB類のようなものと、パレススタイル土器のように斉一性が強いものがある。A類は後者にあたり、一定の型式設定が可能であ

ると考えられる。柳ヶ坪遺跡出土資料を基にして、A類を柳ヶ坪型土器として認識したい。

柳ヶ坪型土器の時期については、廻間III式期を中心としていることは動かしがたく、始まりが廻間II式期末からIII式期初頭、終わりが廻間III式期末～松河戸I式期前半と考えられる。またB類については廻間III式期前半まで継続していると思われる。

柳ヶ坪型土器の成立にはB類土器が深く関わっているが、それのみではなくパレススタイル土器や二重口縁壺の要素も加わって誕生する。全体の器形は後者の影響が強く、B類の文様要素と折衷し成立したのが柳ヶ坪型土器と考えられる。

それでは柳ヶ坪型土器はどこで生まれたので

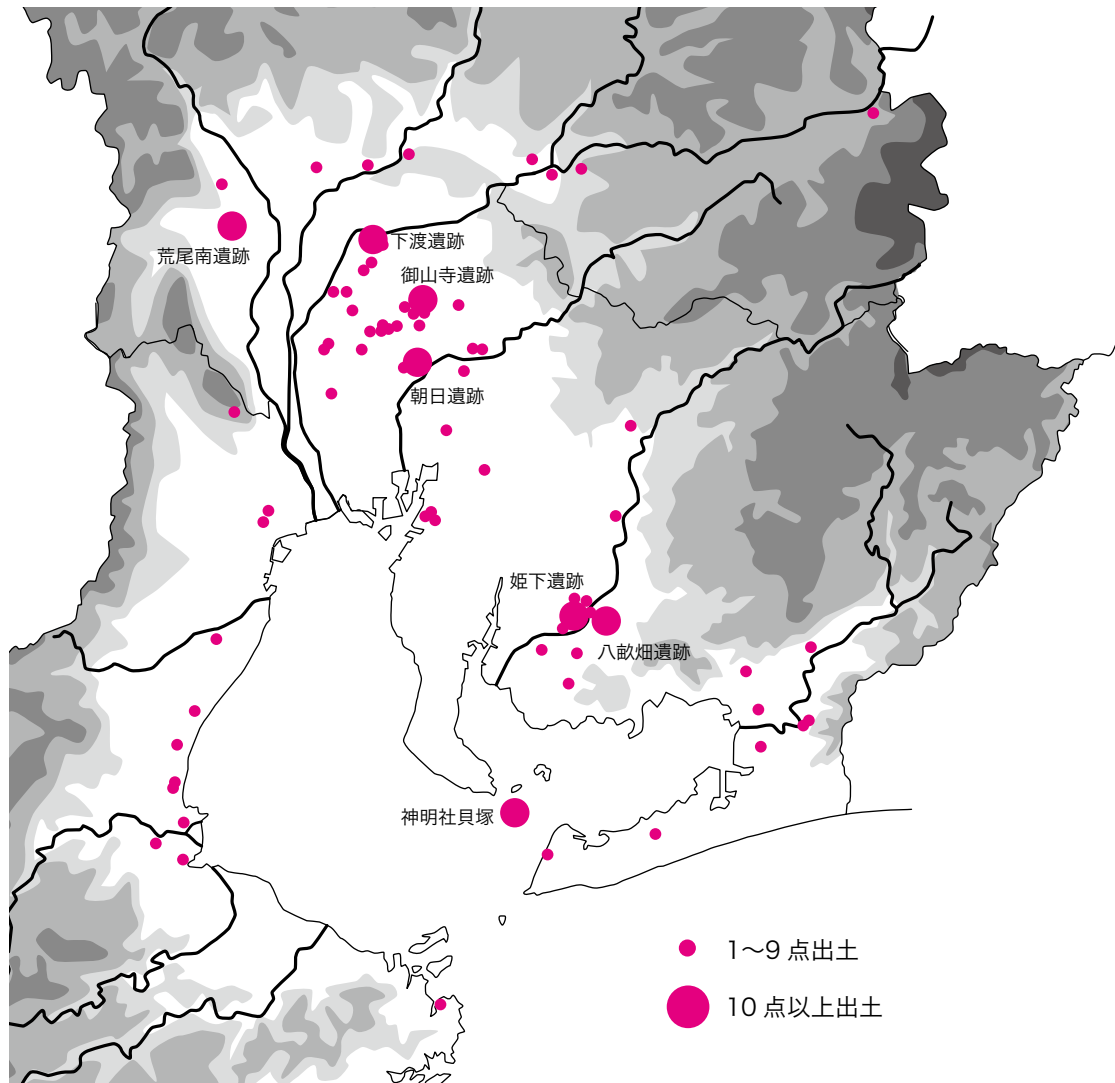


図7 口縁部内外面刺突加飾壺 A 類出土分布図

あろうか。B 類土器がある程度普及している地域とすれば、東三河山間部・矢作川下流域・尾張北部・大垣市周辺・南伊勢地域があげられるが、東三河山間部と南伊勢地域は A 類へと繋がっていない。矢作川下流域の可能性も否定できないが、パレススタイル土器との接点を考慮すると尾張北部、さらに大垣市周辺地域を含めた一帯で成立したと仮定しておきたい。

今回は口縁部内外面刺突という限定した要素から柳ヶ坪型土器をみてみたが、片面のみの刺突やさらに羽状文の使用といった面からもその成立を考えてみるべきであろう。またパレススタイル土器と柳ヶ坪型土器は、直接的な系譜関係にはないとの見通しをたてたが、両者はどちらも斉一性も強くもつ土器であり、時間的にも

パレススタイル土器が衰退する時期に柳ヶ坪型土器が成立するといった、一連の関係を窺わせる面も持つ。広域に斉一性をもつこれらの土器の性格や、製作・流通に関わる問題が浮かび上がってくる。さらに遺跡でまとまって出土する例も多く、杉崎章氏も指摘されていたように神明社貝塚や白浜遺跡のように海岸部近い遺跡での出土があることや、下渡遺跡や鹿乗川周辺の遺跡のように河川に近い低地部での出土も目立ち、その用いられ方を考える上で遺跡の性格や出土状況にも注意が必要となる。

本稿ではまったく単純化して考えたが、今後柳ヶ坪型土器の成立についてのさらなる詳細な検討や土器の用途などの解明が必要と考えられる。

参考文献

- 浅井（北村）和宏 1986 「〈宫廷式土器〉について」『欠山式土器とその前後』
岩崎卓也 1985 「土師器による編年」『季刊 考古学』第10号
大参義一 1968 「弥生式土器から土師器へ—東海地方西部の場合—」名古屋大学文学部研究論集（史学）47
杉崎章 1953 『柳ヶ坪貝塚』愛知県知多郡横須賀小学校
杉崎章 1956 『横須賀町史別冊 横須賀の遺跡』愛知県知多郡横須賀町
杉崎章他 1971 『柳ヶ坪遺跡』東海市教育委員会
早野浩二 2015 『石座神社遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第189集